2026 年度学習院大学史学会総会
第 42 回学習院大学史学会大会

2026 年6 月20 日(土)

総会　9:30 ～ 10:50
大会　11:00 ～ 17:50　会場 : 学習院創立百周年記念会館
懇親会 18:00 ～ 20:00　※総会･大会は対面にて開催します（入場無料、事前申込不要）

▶研究報告

第 1 部　11:00 ～ 12:00

戦国大名今川領国の検地に関する考察
渡辺　翔太 (学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程修了)

第 2 部　13:00 ～ 14:00

主政・主帳と律令国家の成立―郡司制の再検討―
池田　純（学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程）

戦国から秦漢期における雇用労働の成立とその産業分布
鄧　　喬丹（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士後期課程）

第 3 部　14:10 ～ 15:10

毛利輝元補佐役「御四人」の外交における役割
吉田　匠一郎（学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程）

北宋開封における生活文化の諸相―『如夢録』を手がかりとして―
松田　亮（学習院大学東洋文化研究所助教）

▶ミニシンポジウム

「文明世界と歴史の生成ー帝国と周縁が交錯する時空ー」

基調講演　15:20 ～ 16:20

10 世紀ビザンツ皇帝の世界観と外交儀礼ー再生されるキリスト教ローマ帝国の理念ー
大月　康弘（一橋大学理事・経済学研究科教授）

コメント・全体討論　16:30 ～ 17:50

コメント　羽田　正　（東京大学名誉教授）
鐘江　宏之（学習院大学文学部史学科教授）

司会　工藤　晶人（学習院大学文学部史学科教授）

主催：学習院大学史学会／共催：学習院大学文学会

お問い合わせ：〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1 学習院大学文学部史学科研究室内
E-mail: g.shigakukaitaikai1192@gmail.com　HP: https://www-cc.gakushuin.ac.jp/~hist-soc/

研究報告概要

第１部　11:00 ～ 12:00

戦国大名今川領国の検地に関する考察　　**渡辺　翔太**　　**於 第１会議室**

戦国大名今川領国の検地は３種類の方式がある。１つ目は「今川仮名目録」に基づき、本主の申告分より多く支払える新名主に名主職を認める公事検地である。２つ目は新領地獲得・災害時の大名検地である。３つ目は国人衆や名主層が行う給人検地である。取り分け、本報告は給人検地を対象とする。軍役を担う給人は戦乱による影響を受け、困窮した給人は大名からの扶持を必要とした。この様態を近年、検討されなかった史料を切り口として考察を行う。

第２部　13:00 ～ 14:00

主政・主帳と律令国家の成立―郡司制の再検討―　　**池田　純**　　**於 第１会議室**

本報告では、従来研究の進んでいない郡司の第三・四等官である主政と主帳について以下の順で考察し、明らかにする。①主政・主帳の大宝・養老令文上の特徴を、主政・主帳の独自規定と郡司共通の規定から考察。②八世紀における主政・主帳の実態を、補任実態からみる出自と、地域社会との関係から検討。③主政・主帳の成立過程を、孝徳朝、浄御原令期に分けて考察。最後に、律令国家の成立における主政・主帳の意義を明らかにする。

戦国から秦漢期における雇用労働の成立とその産業分布　　**鄧　喬丹**　　**於 第４会議室**

本報告は、戦国から秦漢期における雇用労働の成立過程とその産業分布を、出土簡牘および伝世文献を用いて検討するものである。　農業・手工業・商業などの各分野における雇用労働の具体的事例を整理し、その広がりと性格を明らかにするとともに、国家による労働統制や「重農抑商」に代表される農業重視政策との関係を考察する。これにより、古代中国における労働編成の実態と社会経済構造の一端を再検討する。

第３部　14:10 ～ 15:10

毛利輝元補佐役「御四人」の外交における役割　　**吉田　匠一郎**　　**於 第１会議室**

毛利元就は、孫の輝元が毛利家当主になる際、一門の小早川隆景・吉川元春、庶家の福原貞俊・口羽通良からなるいわゆる「御四人」による補佐体制を構想した。「御四人」は、内政・外交・軍事において重要な役割を果たしてきた。本報告では、「御四人」が外交において、どのような役割を果たしてきたのかについて検討し、その職掌に差があったのかについて考察する。

北宋開封における生活文化の諸相―『如夢録』を手がかりとして―　　**松田　亮**　　**於 第４会議室**

本報告は、北宋開封の生活文化を、明末清初の頃に記された文献『如夢録』を手がかりに考察する。同書自体は明代開封の様相を記したものであるが、その叙述意識には北宋末徽宗期に著された『東京夢華録』との深い関わりがあり、北宋以来の遺風が色濃く反映されている。本報告では、叙述背景および内容の分析を通じて、北宋から変容・継承した社会・文化の特質を検討する。近年急速に進みつつある北宋開封の発掘調査も踏まえつつ、開封研究における新たな視座を提示したい。